

データ収集・発信にあえて人力要素を残す



中村 雅子

デジタルアーカイブで一般市民に情報提供してもらおう際、ネットに公開したときのメ...

以前本欄でも紹介したが、現在、大学の立地する地域で、市民グループや図書館とともにデジタルアーカイブの構築に取り組んでいる。そのインターネットでの情報発信を考えると、つねに問題になるのが二次情報の利用可能性である。自分で書いた文章や撮影した写真（一次情報）は、対象や取材先への確認は必要なもの、それがいったんクリアできれば比較的自由に使うことができる。しかしデジタルアーカイブで紹介したいような古い写真や記録の場合、許可を取らうにも、だれがいつ撮ったか書いたりしたのか記録がないものもある。状況から判断して著作権の保護期間が切れているとしても、実質的に利用が難しく断念す...

取りを間に挟む形でご協力いただく仕組みにしようとしている。一方で個人所有の古い写真やデータの収集には、このようなコツコツ地道な取り組みが重要だが、古い記録という意味では、行政や学校などの公的な機関が保有する歴史的資料の公開に大きな期待が寄せられる。とくに公的機関の持つ資料では、関連情報が残っている場合が多く、資料性も高い。今日、関連する取り組みとして、本紙をご覧の方々の多くはすでにご存知と思うが、公的機関が保有する情報を積極的に公開するよう働きかけるオープンデータ活動が世界各国で注目されている。国内の取り組みとしては鯖江市の「データシティア鯖江」が有名だが、ポトムアップで行政に対して働きかける運動も活気を見せている。このような流れの二環として、歴史的資料も公開が進み、それとの連携ができることが期待される。

なかむら・まさこ 東京都大学環境情報学部教授。主要な関心・テーマは地域・コミュニティやユーザからみたメディア・情報システム。京都大学博士（人間・環境学）。